

Stereo

2013
June
6

オーディオの総合月刊誌 ステレオ

創刊50周年
特別付録

故瀬川冬樹氏がStereoに遺した
「SMEトーンアームの徹底的研究」

記念企画

本誌筆者7名が語る「私の50年と愛機」

特集 ①スピーカーを熱く鳴らせ! ②スピーカーセッティングの盲点を突く!

●FM放送「名盤片面」に迫る

50th
Anniversary
STEREO



細部にわたる改良が施され その美音に磨きがかかった シンフォニーエディション

小規模を保ち、良質な製品を送り出す
ウィーンの名門が新たな代理店で国内再参入

文・貝山知弘 Tomohiro Kaiyama

Photo・K. Kazama

ベートーベン・ベビーグランド Symphony Edition

スピーカー | ¥315,000/1台

ウィーンアコースティクス

spec

形式 ● バスレフ3ウェイ4スピーカー

使用ユニット ●

2.8cmネオジウムシルクドームツイーター

15.2cmX3Pミッドウーファー

15.2cmX3Pスパイダーコーンウーファー×2

周波数特性 ● 30Hz~22,000Hz

クロスオーバー ● 170Hz, 2.6kHz

能率 ● 91.0dB

インピーダンス ● 4Ω

外形寸法 (W×H×D) ●

170×980×325mm (本体)

260×1,065×325mm (スパイクスタンド含む)

重量 ● 27.5kg / 1台

問い合わせ先 ●

(株)ナスベック Tel.058-215-7510

ウィーンアコースティクスのスピーカーには、懐かしい想い出がある。2006年までの10年以上私の試聴室《ボワ・ノワール》では、現行商品ベートーベン・コンサートグランドの前身である、Model T・3（ベートーベンの日本での型番を5



ベートーベン・ベビーグランドSymphony Edition

基使用し、ステレオ/マルチ両方のリファレンススピーカーとして使っていたからだ。このスピーカーとの出逢いは1998年半ばの『Stereo 試聴室』。このスピーカーが奏でる弦の美しく、なめらかな音に心震えた私は、即座にこの製品を自分の試聴室に導入したのだ。2006年にはグレードアップしたT・3G2台をステレオ再生用に買い込み、一周り小型のT・3GBを購入し、マルチチャンネルのセンター用に使っていた。

ソ ン ワイエンザールで聴いた響きを再現

今回試聴した新製品はコンサートグラウンドシリーズのベーターベン・ペビーグラウンド、シンフォニーエディションである。キャビネットサイズは、このシリーズのハイエンドモデルベーターベンコンサートグラウンドを一回り小さくした製品で、ユニット構成は3way4スピーカーである。下部には2個のウーファーを配し、その上にミッドウーファー、トップ近くにネオジウムマグネットとシルクドームコーンのカスタムメイド・トワイターがセットされ

ている。2個のウーファーには同社のユニットの特徴であるクモの巣状の補強が施されたヘスバイダー・コーンを採用している。この補強は極めて効果的で最大250Wのアンプ出力に耐えることができる。ミッドバスのコーン素材は高剛性で超軽量の高機能樹脂(X3P)、ウーファーのコーン素材も同様の3種類のポリプロピレンを複合したものだ。試聴に使用した機器は、Stereo 試聴室のリファレンスシステムはアキユフェーズのCD/SACDトランスポートDP・900+DC・901(DAC)、コントロールアンプC・3800、パワーアンプA・2000×2である。

日下紗矢子のCD『リターン・トゥ・バツハ』を聴いて思わず微笑んだ。かつてワイエンアコースティックスのスピーカーとの出逢いで体験した、しなやかなバイオリンの響きがより高い次元で、心にしみ込んできたからだ。もちろん、再生機器も最新の高級機に変わっているし、CDも10年前とは比べものならぬほど進化しているのだから、厳正な比較試聴ではない。しかし、弦楽器のニュアンスを好ましく再現するという、このスピーカーの製作者の感性は変わっていなかった。適度な倍音

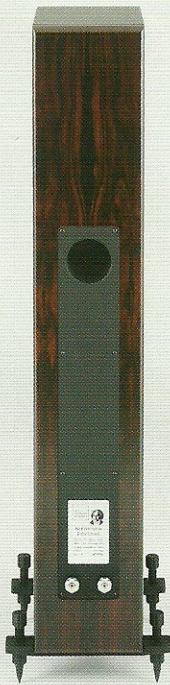
に色どられたバイオリンソロの音は実に美しく響く。それはなめらかで光沢のある響きだ。かつてワイエンアコースティックスのスピーカーと付き合っていたある時期、私は意図的にワイエンフィルのニューイヤール・コンサートのディスクを集めて聴いたことがあった。このスピーカーが再生する響きは、ワイエンのソフィエンザールで聴いたワイエンフィルの響きに近いと感じたからだった。中だった。私は「輝きがあつてなめらかな弦の響き」に溺れた。

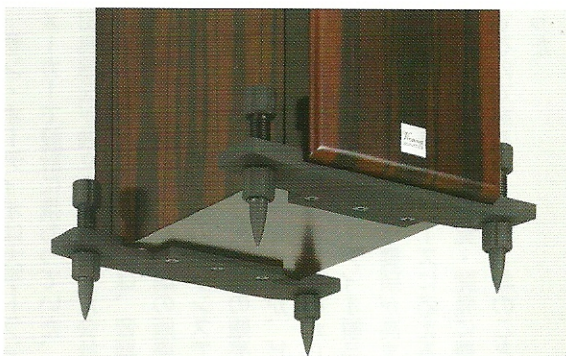
シングルであることが上げられる。バイワイアリングを採用しなかったのは設計者の自信の現れである。基本的に、にエネルギーバランスに優れた製品なので、その必要はないというのがその答えだ。

弦の美しさはもとより
大編成オケにも
魅力溢れる

今回試聴した新しい新製品は、弦以外の楽器にも好ましい適性を発揮した。ユジャ・ワンの弾くピアノ・ソロ《ファンタジア》では、多彩な

本機のリアパネル





スパイクもより調整範囲の広い強靱なものに変更された

響きを表現できる演奏者の感性が克明に表出された。スカラッティのソナタでは、一音一音が弾むように連なっていくフレージズの演奏では、ピアノの音の粒立ちの良さが輝きを増し、「妖精の踊り」では感性の細かい揺れ動きが克明に表出できている。本機の解像度の高さは一級品といって良く、演奏の細部の緻密な表現に長けている。指揮者や演奏家が試みるわずかな強弱の付け方、テンポの早め方遅らせ方、音色の多彩な表情を実に細かく表出してくれるのだ。

編成の大きなオーケストラの再生

では、このスピーカーが持つもうひとつの顔が味わえた。それは量感と力感に満ちた豊かな低音表現とステールの大きい強靱な表現であった。

ニコライ・アレクセーエフ指揮アーネム・フィルのシングルレイヤース・ACD盤（EXTON OVCLO・01717）は私が推薦する高音質盤だが、第2楽章冒頭のコントラバス&チェロの深く沈んだ強いリエゾンが体験できるし、最終楽章ではティンパニーやグランカッサの強奏が直に身体を揺する。第一楽章のバイオリン群の響きはテンションが高く、強奏時に張りつめた表情で鳴り響くが、歪みの少ない本機で聴く限り、それが耳を刺激することはない。

ハイCPのスピーカーとして改めて推薦したい

今回試聴で使用しているA・200は200Wの高出力パワーアンプだが、本機で聴く限り、かなりの大音量でも音が崩れることは全くなかった。わたし自身は大音量再生が好きだから、本機は安心して鳴らせるスピーカーということができる。

低音域が充実し、中・高音での歪みが少ないこのスピーカーは、とく

改良された中高域部



に部屋を選ぶことはない。ただし、そのセッティングに関してはいくつかのポイントがある。まず豊かな低音の量感が出すぎて低音が膨らみやすい傾向がある。これを解決するには、バスレフダクトがあるスピーカー背面から、壁までの距離を通常のスピーカーの場合より5〜10cm長くするといい。底面にとりつける金属製の脚は長い方だが、低音の締めまりを維持するにはこれはかならず付ける方がいい。

私が久しぶりに再会したウィーンアコースティクス社のスピーカーは健在だった。代理店が2度変わったたり

したために、告知が少なかったが、今回ナスベックが販売を引きついでくれたことは朗報である。もともと完成度の高いスピーカーであったが、その完成度の高さは最新のアンプやプレーヤーとの組み合わせで、さらに高まったと言える。この製品は広いユーザー層の様々な欲求を実現することができる。あらゆるジャンル音楽に対応し、時流に流されぬ完成度の高さを考えると、この製品の価格は特筆するほど安い。ハイCPのスピーカーとして改めて推薦する次第だ。